

(報告)「生態学の展望」

1 現状及び問題点

環境問題の重要性が浸透し、環境負荷の少ない社会の実現は世界的潮流となりつつあり、その基礎科学として生態学の役割は増している。他方で、生態学は、生命科学や情報科学と結びついて、学術的にも大きく飛躍しようとしている。本報告では、日本の生態学の現状をレビューし、さらなる発展に関与する事項や急速に発展すべき研究について報告している。

2 報告の内容

(1) 今後急速に発展すべき分野

地球環境変化の科学としての生態学は、生物多様性や物質循環など地球規模での危急課題の解決に貢献する必要がある。また、生物多様性の創出とその役割を理解するには、生理学的観点と生態学的観点との統合が必要である。さらには、大規模データを活用することで、生態学的現象の理解が大きく進むだろう。

(2) 社会への貢献

自然共生社会の実現に向けて、社会－生態結合システムの理解は、生態学の今後の重要な研究テーマになる。また、農学や医学において、生態学に基づいた新しい分野が急速に進展するだろう。初等中等教育における生態実習に生態学者のノウハウを活用してもらう体制を整える必要があるほか、科学研究の面白さを伝えられる研究経験のある教員の養成が重要である。

(3) 研究費・研究体制・若手研究者の育成・生態学の認知度を高める努力

生態学と他の研究分野との学際性を高めると同時に、ステークホルダーとの協働・共創をすすめ、Future Earth やSDGs に関わる研究を生態学分野から積極的に提案してゆく必要がある。また、中核となる生態学研究者による大規模研究や長期研究の推進努力が望まれる。中核的研究機関である京都大学生態学研究センター及び総合地球環境学研究所を、国内の研究ネットワーク拠点として維持していく必要がある。フィールド研究・教育施設では、貴重な教育・研究の機会が提供されており、さらなる広報や研究・教育設備の充実が求められる。

大学院生や若手研究者は、英語でのコミュニケーション力を格段に強化することが求められる。また、地球環境問題に関する国際的な取組に貢献する人材の養成が必要である。博士課程修了者やポスドク経験者が、そのキャリアを活かせる多様なキャリアパスが必要である。

国民的・社会的なサポートがなければ、学問分野の持続的な研究活動は保証され

ない。生態学者は、生態学の重要性を広く浸透させる努力が求められる。